東京都北区立袋小学校

令和5年度　北区立小学校学力向上を図るための全体計画

令和5年度「北区基礎・基本の定着度調査」を受けての各教科の分析	
国語	学校全体（2～6年）の国語の正答率は、全ての学年が区の平均正答率と同等か、もしくはそれを上回っている。しかしながら、「書くこと」に関する領域においては、学年が上がるにつれて区の平均正答率を下回る傾向が見られた。普段から書く習慣を身に付けられるよう、低学年のうちから書く力の育成を推進していきたい。
社会	学校全体（5，6年）の社会の正答率は、全ての学年が区の平均正答率と同等である。やや知識の定着に課題が見られる様子があることから、単元学習後に復習の機会をもつなどの工夫をしていきたい。また、内容別では「都道府県の様子」「工業生産」で課題が見られているため、知識・技能面の定着を図っていく必要がある。
算数	学校全体（2～6年）の算数の正答率は、全ての学年が区の平均正答率と同等か、もしくはそれを上回っている。しかしながら、学年が上がるにつれて区の平均正答率と同等となる傾向が見られた。特に、観点別では「主体的に学習に取り組む態度」の正答率が低くなっている。基礎・基本的な力の定着を図るとともに、問題解決型の授業を展開させていく必要がある。児童自身が自らの学習課題をもち、主体的に学習に取り組んでいけるようにしていきたい。
理科	学校全体（4～6年）の理科の正答率は、全ての学年が区の平均正答率と同等か、もしくはそれを上回っている。どの領域や観点別においても、区の平均正答率を上回っているものが少ない。このことからも、基礎・基本の定着を図りつつも、観察・実験などを通じて、科学的に探究する学習活動（主体的に学習に取り組む活動）における指導の充実を図っていきたい。

本校の教育目標

〇よく考える子

〇体をきたえる子

〇思いやりのある子

〇最後までやりぬく子

学力向上にかかわる経営方針

・「わかる」「できる」喜びを味わえる授業改善
・北区基礎・基本の定着度調査等の結果を基にした個に応じた指導の充実
・授業観察による指導・助言や校内研修等のOJTの推進（きたコンの扱い方を含む）
・GIGAスクール構想に基づく、ICT機器の活用

本校が児童に育成したい力

・生きて働く「知識及び技能」の習得
・未知の状況にも対応できる「思考力、判断力、表現力」の育成
・学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力、人間性等」の涵養

校内における学力向上推進体制

学力向上に関する特別委員会（研究推進委員会、学力向上・少人数推進委員会、通知表委員会、特別支援教育委員会）、分掌（授業改善推進プラン、学校図書館、放課後補充教室（学力フォローアップ教室）等を有機的に機能させ、児童の学力向上を図る。

本校の授業改善に向けた視点

指導内容・指導方法の工夫	教育課程編成上の工夫	校内における研究や研修の工夫	評価活動の工夫	家庭や地域社会との連携の工夫
・課題解決型・探究型授業の実践 ・児童に「わかる」「できる」喜びを味わわせる授業づくり ・学習活動「振り返り」の充実と継続 ・十分な教材研究によるねらいの明確化 ・児童が主体的に取り組む学習活動 ・授業のユニバーサルデザイン化 ・GIGAスクール構想に基づく、きたコンの積極的な活用 ・Q－U調査を活用した学級経営	・授業時間確保のための学校行事の継続的な見直し ・生活科・総合的な学習を中心としたカリキュラムマネジメントの計画 ・放課後補充教室（フォローアップ教室）の充実 ・きたコンを活用した学習タイムの推進（個別最適化した学習） ・日本語学級の充実と担任との連携	・運動の楽しさや喜びを味わい、三つの資質・能力を育む体育学習を目指した授業づくりについての校内研究 ・授業改善を図るための、教員同士の積極的な授業参観−ブロック会での事後検討を通して− ・組織的で授業に生かせるOJT（校内研究関係、情報モラル等）	・児童の実態に即した評価規準に基づいた観点別評価の実施 ・評価規準や評価方法の工夫・改善（きたコンを利用したデジタルポートフォリオの活用） ・きたコンを活用した教科横断的な学習計画の作成 ・PDCAサイクルを意識した指導と評価の一体化	・学校ファミリーにおける情報交換 ・地域の教育力の活用 ・保育園等との交流 ・ホームページの充実と更新 ・学校ボランティア、PTAとの連携 ・学校便りの発行（月１回） ・児童の変容を自身も保護者も感じる事ができるキャリアパスポートの活用

指導方法の課題分析と具体的な授業改善案　（3年）

	指導方法の課題分析	具体的な授業改善案	補充・発展指導計画
国語	内容別正答率を見ると、「漢字を書く」と、「言葉の学習」「物語を読み取る」の3つの内容に課題が見られた。特に「漢字を書く」は区の平均より下がっており課題が大きい。まず、1・2年生で習った漢字を確実に書けるようにし、次に3年生で習う漢字を書けるようにさせる事が大切である。	まず、1・2年生で学習した漢字の小テストを行う。問題は事前に配布し、実施日も事前に知らせる。事前学習をきたコンのコンテンツを利用して練習させる。また、お題を決めて日記を欠かせながら習った漢字や片仮名を積極的に活用できるように促す。	小テストでの学習や課題別の日記等を使用し、漢字を書く機会を意図的に増やす。また、きたコンのEライブラリやスタディサプリなどのコンテンツを活用したり、類似問題に取り組ませたりする。学習の中で話し合い活動を位置づけ、他者の意見を知ったり、全体での共有を充実させたりしていく。
社会	本年度は社会科見学に出て体験的に北区内の様子を知ったり、お店の工夫を調べたりすることができた。机上での学習を実生活と結びつけることがまだまだ足りていない。保護者の力も借り、教科書での学習を、実社会に出て確かめたり体験したりできるようにしていく。	北区の土地の様子については本校の立地を生かし、川沿いの土地の様子や高い土地の様子等を学ばせた。それと同様、身近にある事物に関心を向け、教科書での学習を自分の住む地域と結び付けたり、出かけた土地と結び付けたりしながら、学習内容が実体験と合致するように、資料や実物も見せながら学習を進めていく。	可能な範囲で社会科見学を入れて実体験ができるようにしていく。また、体験できないものに関しては、ICT機器を活用し動画を見たり調べたりすることで文字の情報だけではなく、理解の定着を図る。
算数	区の平均と比べ、「10000までの数・分数」は大差ない。数の相対的な大きさの理解を深めたい。「たし算・ひき算」も大差は無いが、繰り上がりと繰り下がりの問題の定着を引き続き継続して行っていきたい。その他は区と大差ないか上回っている。得点を習得できている児童と、そうではない児童の差があるので、日頃の学習での習得状況も考慮する必要がある。	授業で問題を解くとき、図や絵、数の線などをかかせる習慣をつけさせていく。今回の結果から感じた、数の相対的な大きさを視覚的にイメージ化する習慣をつけさせたり、繰り上がりや繰り下がりの途中計算を問題に残し、見直しに生かす習慣を定着させていく。今後授業で取り組む学習についても、図や絵、数の線や式、言葉でかいて問題の意味や量的感覚を捉えさせていく。朝学習や授業の最初5分程度の時間があれば、該当単元の問題を出題し、取り組ませる。	問題を解くとき、図や絵、数の線などをかかせるだけではなく、それらをもとにして問題を解かせた後、自分の考えを隣の席やクラスの友だちに説明することで、伝える力を養わせる。個別に支援が必要な児童に関しては、友だちの説明や、説明で使用した図や絵について何を示しているのかを考えさせたり、友だちと話し合わせたりすることで、学習への意欲・関心を高めさせていく。
理科	自然事象に対する興味や関心が高まる年代であると共に、教科の好き・嫌いが分かれ始める時期でもある。児童が理科に対して驚きや疑問を持てるような授業づくりを行う。また、初めての理科ということで理科嫌い、理科離れを生まない素地を築くことを授業づくりの基礎としていく。	観察単元の多い学年であるため、児童の興味や関心を高めることを大切にする。観察対象である動植物をいつでも見られるようにするため、花壇や教室での飼育や栽培を行う。植物や動物変化に気付けるような環境をつくる。	自分の住む地域にも、理科で学習したような自然事象や、実験で知ったような現象があるかを興味をもって探させる。学校のビオトープなど周りにあるものから四季を感じられるようにしていく。